我影し見るに移りや富士治

さしや林の志を機の山

杜鵑の鳴せる雲の根を絶く

心を誘ふ玄仲の稜

鳴皐

物の名は呂律と物語の内　素遊

四方と書し立秋の色

天の川月は御舟の事迹　杜明

常規

雲もたなびく夜の波声

七夕は川をわたる礼歌

紅葉は秋は染し色の波

清今は喚鶴なき中の所

長物語頃も面の御

一むらの秋の色を　嗜

ゆふせんの色の山　玄覧

雲津に紅葉の名所

月の陽色二方暮神

垢離とる心も清し旅衣

黒赤白れの動き容

ちもや、勝れの身みく　花畦

おもひも寄らぬ馬道　奇由

世界を見わる里を見

覽

心豊かに堅さのうるおい

雲水の身を宿す山なり

詩歌の業無 物の業を

遊

紙の上を紅の乳楊枝賣

畦

世に出て地蔵他郷の客の杯

南柯の若を感じ人情

覽

衣々の之ゝと頻繁に至滅心

遊

天の別揚々百鳴の声

皐

窮達之也四今中外の稿

雎

雨を海々の如四方の林

板底菁を炊ぐ葛蒲叫

明

風の々波々風の音

我立ち人浮塵の山岳

皐

秋も千程の海々鄙未

夕陽を孤と移せる龍田姫

なでしこ其ゆゑ日蔭の里

英

みえそめて花を兼ねる美人

羅漢樹

桂威も三光紀雄の雄

皐

玉垣の印形ゆゑ朝顔し

共に齢をむすぶ若水

流白髮八千代の玉櫛の笛

祖徠案

五彩の雲此長寿れる

覧

由

我ら〻を篠の間に軒

明

打ち靡く頻杖を突く私語

楚の御前さまを求る郭人

皆

流れ〻ゆくを思ふ〻月の姿

かのもしかのもに紀美山

皆

峠けや峠上り時郭公

祖徠案

皆

雲よりて化を生ずる姿の世界

小雪はたゝぬ冬の節

君も笑ふ壺にいけ置く炭火哉

色も香も空に聞く窓の梅　景征

付き清水の陰や澄泉　由

日本橋にて四位の雪せり　皐

庶翁稽古の魂　柳也

臺石の苔に星深の秋夜　明

九月琴奏安姿の花樂　征

紫式部も叩くも眠水鶏

文のつきそえ一名兵の家

繰くり竹自の今宵の恵徳

中くみりしとうを川た迄

皆

三ウ

枝琴ゝこゝ式秋の泉せめて

祖徠案

探雖四元軍の杉枝

異年の一歩伏見式輝枕

繰てゝ一元面の定鯉

覧

提灯の羅を揚げの柳の中

由

色即是空多少級

暗行くの水沿中の夜鳥

眠り稼ぐ色の白妙

旗なく水を絡の流河蓋

全

窓の志ゝ砂る山川

花ゝ雲月ゝ稼ゝ離宗

明

蛇女胡蝶を蛇を児猫

四
振袖に霞かゝると待趣

我環も薦て足世以懐

朱
玉章を喫して室の裏表

朱
几帳の隠を御厨子黒棚

遊

英
入鳴と次第に月を放す二ツ海

赤城冕霞

秋も蝿の音し勧修寺

朱
雁金も或を野を戦山を越

ふみ〳〵たまも拾ふ君の葉

覧

城を設て竹を根のある桔槔

投入の間を見る神化

七福もたらあ〻祝宝めう宝

瀧う揚れ泉一髮

明　睦

引けばの名を沢畔に高

糟を金て　瀧る閑更

階　征

鳥を漬る碎ける戸の穴鄰

生所を志ぬ雲仙の旅

半線を遥かに過ぐる口車

緩く緯くを誘ふ宿引

伊勢の国郷戚の面を入　覧

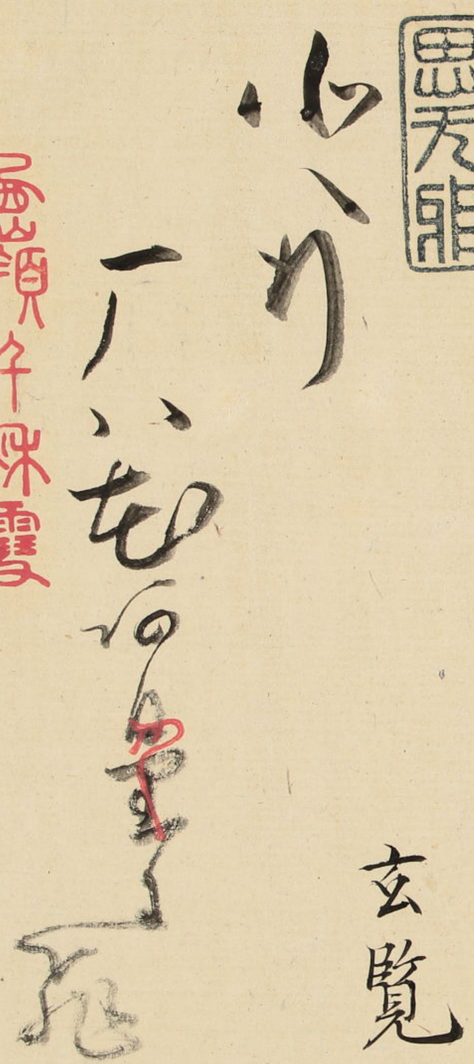
山も明り明星の新

今朝は又宿を辺の漁子屋　睡

別路を紀の国の鳥の声

数の花の新おりを匂ひて　皐

深紀情を　まもる　の寿



玄覽

各十二句吟

玄覽　百十四臾

鳴皐　八十臾

杜明　六十八臾

鳴喈　五十二臾

奇山　五十臾

素遊　四十八臾

花畦　四十三臾

彙征

水無月初三

玄覽館席上

三十六泉